

子ども食堂利用者とは誰か コロナ禍の子ども食堂利用者の声から

黒岡宥菜

論文要旨

本稿は子ども食堂利用者とは誰かを明らかにすることを目的としたものである。子ども食堂についてニュースや新聞などで紹介されるものは運営者側にスポットが当たっているものが多い。子ども食堂を紹介するうえで見過ごされやすい子ども食堂利用者という言葉について考え直す。

そのため、本稿では、休校期間中に行われた子どもの声を調査した先行研究を参考に休校期間中の子どもの声を明らかにしていく。その結果、子どもは、子どもたちだけで過ごす時間があること、暇な時間が多いこと、外出ができないこと、新型コロナウイルス感染防止対策などを求めていることなどの声が多くあがった。ほとんどの子がネガティブな感情で休校期間を過ごしていることがわかった。休校期間中の子どもの声が多くなったが、休校期間が明け、子ども食堂も方式を変えスタートし、新しい生活様式の確立と共に with コロナと言われる 2020 年夏以降の子どもたちの声を調査する。実際に 2 年半通っている子ども食堂へ来ている子どもと大人、スタッフを含めた利用者を対象にしたアンケート調査を行った。その結果、好きなメニューや欲しいメニューが分かったほかに、お弁当配布に切り替えたことで感じている気持ちなども明らかになった。また、新型コロナウイルスについてのイメージ、新型コロナウイルスによって我慢していることなども明らかになった。

このアンケート調査の結果から、子ども食堂は子どもや大人だけが利用者ではなく運営者やスタッフも含めた全員が利用者であり一緒に地域の子ども食堂を作っていくものではないかと感じた。子ども食堂利用者とは誰か、また子ども食堂運営の構図などを考えるにあたって贈与論の考えに近いと感じ、子ども食堂利用者とは誰なのかを考察した。

本稿を通して、子ども食堂利用者とは誰かを考察している。子ども食堂は、子どもや大人、運営者やスタッフなどの区別なしにお互いに良い影響を受けながら地域の居場所となって活動していくものだと感じるようになった。

序章 はじめに

近年、子どもの貧困や子どもの居場所づくりというニュースと共に子ども食堂という言葉が広まった。子ども食堂は 2012 年から始まり特に近年、全国で爆発的に増えていた。2019 年 6 月には全国に 3700 以上あるとされており愛知県内でも約 175 か所の子ども食堂がある¹。子ども食堂は貧困の子を救うと共に地域の居場所づくりとして機能してきた。

子ども食堂について、子ども食堂とは、保護者の就労等により、家庭において保護者らとともに食事を摂ることができない子ども等を防ぐため、夕食の提供や交流を図り、子ども食堂に参加する子どもたちが、子ども同士あるいは、子どもを支える支援者らとともに過ごす取り組みである(吉田祐一郎、2016)²。子ども食堂は公的な定義は存在せず、行っている取り組みや名前なども子ども食堂によって違いはある。だが、子ども食堂には様々な機能がある

¹ NPO 法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ

² 子ども食堂活動の意味と構成要素の検討に向けた-考察 吉田祐一郎 2016 年 9 月

とされる。主に、食を通じた支援、居場所、情緒的交流が子ども食堂にあるとされ、子ども食堂の機能は単に食事をするだけにとどまらない。このような取り組みが全国的に増えている現状である。

しかし2020年に入り、新型コロナウイルスが流行し、感染拡大を防ぐため、以前のようにみんなで集って地域の人とご飯を食べることが難しい現状にある。NPO 法人全国子ども食堂支援センター・むすびえによると、緊急事態宣言解除後も子ども食堂を再開している団体は17%で、予定が立っていないとした子ども食堂は39%になっていることが分かった。一方で開催できない間に食料配布を行った子ども食堂は半数あることが分かった。徐々に開催できている子ども食堂も増えているが、新型コロナウイルス流行前と比較して、イベントや行事などもしにくくなっていることが今の子ども食堂の現状である。このように子ども食堂が開催しにくいということは今まで見えていた子どもたちの現状も見えにくく感じる。

本稿では、近年の子ども食堂ブームにおいて欠落しがちな子ども食堂利用者にスポットを当てて述べていく。調査ではコロナ禍の子ども食堂利用者の声を集め、子ども食堂利用者は何を考えているかを調べる。そして、子ども食堂利用者の状況を調査するとともに「子ども食堂利用者」という言葉を考え直し、子ども食堂とは何かを考えていきたい。

第一章 コロナ禍の子どもたちの声

近年、子ども食堂の活動が活発になっており、子ども食堂の運営形態や子ども食堂の運営者の思いに焦点を当てているものが多い。また、新型コロナウイルスが流行してから、流行前に比べて、子ども食堂を利用していた子どもや大人との関係が取ることが難しくなり、より子ども食堂利用者の声が届きにくい現状ではないかと考える。子どもの声は大人に比べて届きづらく、子ども食堂を通して子どもの声が伝わることもあった。2017年秋に農林水産省が行った子ども食堂についての調査では、子ども食堂で子どもの様子を見て、他の支援機関につなげた経験があると回答したのは43.4%であった³。子ども食堂が子どもたちの声を拾い、地域や行政に繋ぐ役割も担っているが、コロナ禍の今、子ども食堂がお弁当配布などに切り替わっていることも多い。子ども自身も声を発する機会が少ない。国連子どもの権利条約の最大の目標は子どもの「声」を奪わない社会を創ることである。コロナ禍でかつてない状況の今、子どもの声を拾い、記録していくことは重要である。子どもの頃の声は非常に重要である。幼少期や青年期に起こった出来事が成人期に大きな影響を与えるからである。

このことから子どもの声や子ども食堂利用者の声を明らかにしていく。第一章では、新型コロナウイルスが日本でも流行し始めた、2020年3月ころから緊急事態宣言中までの子どもたちの声を見ていく。

第1節 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの調査からみる子どもの声

まず、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの「子どもの声・気持ちを聞かせ

³ 子供食堂と地域が連携して進める食育活動事例集~地域と連携で食育の環が広がっています~
農林水産省 平成30年3月

てください！」2020年春・緊急子どもアンケート結果がコロナウイルス流行中の子どもたちの声を調査している⁴。2020年3月17日から3月31日にかけて、全国各地の小学生から18歳くらいまでの子どもたちを対象にアンケートを行い、1422件の回答が出ている。この調査では、3つの大カテゴリーに分類され子どもたちの声を調査している。

まず一つ目のカテゴリーは日中の過ごし方についてである。「1人で過ごしている時間がある」が全体で14.5%、「家に子どもだけで過ごす時間がある」が全体で3.2%、「ひま、退屈、つまらないと感じている」が全体で9.9%になっている。過ごす場所については「家」が全体で48.3%、「学童」が全体で33.1%、「公園」が全体で7.0%になっている。特に小学生について日中は学童で過ごすことが多く、学童が子どもたちの過ごし方を保障していたことが分かる。

日中の過ごし方について「ひとりで家にいてつまらない」や「兄弟でお留守番をしていて怖い」、「ひま」、「退屈」、「何をすればいいかわからない」といった声が多くあがっている。外でも自由に遊ばず、家の中でひとりや兄弟と過ごし、何をすればいいかわからない子どもたちの現状があることがわかる。

二つ目は、大カテゴリーの困っていること、心配なこと、気になっていることである。「日常生活が送れない・外出できない」が全体の31.4%と最も多く（内、人に会えない・会いたい全体の20.5%）、二番目に多いものが、「体調やり患、心の変化、感染拡大への心配・懸念」が全体の16.0%となっている。三番目に多いものが、「勉強ができない、学力の低下、学校のことなど学びに関わるもの」で全体の15.7%である。そして「非日常の特別な体験の喪失」（7.3%）、「マスク不足」（6.3%）、「運動不足・体力の低下」（3.9%）と続いている。学校が休校であることや家にずっと居続けることなど、新型コロナウイルス流行で突然変わってしまった生活に困っていることが分かる。

困っていること、心配なこと、気になっていることについて、まず、「日常生活が送れない」に関して、外の自由に遊べない、出られないストレスや友達と会えないこと、学校がないことのストレスが多く上がっていた。以前のような生活が送れず、ストレスが溜まっていることがわかる。

次に、「人と会えない・会いたい」について、友達や先生と会えなくて寂しいことが多く述べられている。人と話す機会が減ってしまい、寂しいと感じていることがわかる。

そして、「非日常の特別な体験の喪失」では、主に卒業式などの学校行事がなくなったことがあげられている。3月1日から学校が休校になったこともあり、卒業式の時期と被っている。友達や先生と十分に思い出を作ることなく卒業という形になり、辛く感じている。

「生活習慣のみだれ」では、昼寝をしてしまって夜に眠れないこと、生活リズムが崩れること、学校へ行く習慣がなくなったため朝起きられなくなったことなどがあげられていた。学校がなくなったことから、朝起きる習慣などがなくなり、生活リズムが崩れると感じている。

「運動不足・体力の低下」では、体育や部活がなくなり運動ができないこと、外に遊びに行けなくなったなどがあげられている。運動不足による体力の低下を感じている。

⁴ 「子どもの声・気持ちをきかせてください！」2020年春・緊急子どもアンケート結果(全体報告書) 公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 2020年5月3日

「勉強ができない、学力の低下、学校のことなど学びに関わるもの」では、宿題が多いことや分からないこと、勉強をしなくなったことがあげられている。学校がなくなり、勉強を教えてくれる場所がなくなり不安に感じている。また、受験を控えている子どももいるため勉強の遅れなどを気にする声もある。

「保護者の生活状況に対するもの」では、親が仕事で家にいないことと反対に親の仕事が休みなどで家にいてイライラしているという声があがった。親が家にいない寂しさ、逆に、親が家にいることのストレスを感じている。

「体調ややり患、心の変化、感染拡大への心配・懸念」では、新型コロナウイルスにかかることへの不安が多くあげられている。正体分からない、今年突如流行しているウイルスへの不安を感じている。

「マスク不足」では、マスクが手に入らないことへの不安が多くあげられている。新型コロナウイルスが流行りマスクが品薄になる事態が起こった。2020年春ごろまではマスクがかなり不足しておりマスク不足に対して不安を感じている。

最後に、「その他困りごと・心配なこと」では、お金がないこと、部屋に閉じこもっている影響で気が病んだり引きこもりになることへの不安や栄養不足になることへの不安があげられている。

三つ目は、大カテゴリーの新型コロナウイルス対応策に関する要望である。最も多いものは「医療・保健衛生、行動規制、安全を求める物など新型コロナウイルス・感染症への対策」であり全体の15.6%である。二番目に多いものが、「学校生活のあり方」で全体の13.0%である。三番目に多いものが「情報提供や意見尊重の必要性(子どもに対してを含む)で全体の9.3%である。そして、「学校に行きたい(行きたかった)や学校の再開を求めるもの」(8.2%)、「マスクやトイレットペーパーなどの物資の供給」(8.1%)、「遊びや運動、居場所など子どもが過ごせる場・機会・物・方法の確保・提供」(7.3%)と続く。また、「学校へ行きたい」と答えたのは、学童経由ではない小学生(低学年)が最も多く、15.5%であった。友達や学校の先生に会えない状況が長く続いていることから、回答の割合が高かったと推測される。

「新型コロナウイルス対応策に関する要望」について声を詳しく見ていく。まず「卒業式・入学式のあり方」では、卒業式がなくなること、卒業式がない代わりに同窓会やビデオなどを求める声があがった。一生に一度のイベントが仕方なくなくなり何とかしてほしいと感じている。

「学校に行きたい(行きたかった)や学校の再開を求めるもの」では、学校の再開を求める声が多くあがっている。

「学びの保障を求めるもの」では、学校がテレビ授業でもいいからしてほしいといった声や勉強が遅れることへの対処法や勉強ができる空間を作ることを求める声があがっている。宿題だけでは不安に感じている。

「学校生活のあり方」では、学校が始まった場合への不安が主に書かれている。夏休みや冬休みの短縮や授業やテストなどを詰め込む可能性への不安、また、学校再開が急に決まることへの不安が多くあげられている。学校再開後にどのような生活になるか見通しが立たないため不安に感じている。

「情報提供や意見尊重の必要性」では、新型コロナウイルスに対して説明不足ではないかという声がかかれている。新型コロナウイルスについて、あまり分からず不安に感じている。

また、政府に対して、情報提示をしてほしいといった声もみられる。

「医療・保健衛生、行動規制、安全を求めるものなど新型コロナウイルス・感染症への対策」では、薬を開発してほしいことや検査数が少ないことに対して書かれている。また、新型コロナウイルスにかかった人への差別に対しても不安に思っていることが書かれている。

「マスクやトイレトペーパーなどの物資の供給」では、マスクやトイレトペーパーが不足しているため、配って欲しいなどが書かれている。

「遊びや運動、居場所など子どもが過ごせる場・機会・物・方法の確保・提供」では、遊び場の確保、子どもの行き場の確保を求める声を書かれている。遊び場がなくなった子どもたちは遊べる場所を求めていることがわかる。

「経済や労働環境対策・支援」では、支援金を求めている声あげられている。学校の授業料や教科書購入などの教育費の確保を望んでいる。また、就職支援など前年に比べて不利にならないような対策を求めている声もあった。

また、この調査で現在の状況をポジティブ・前向きにとらえている回答もあった(4.1%)。その声を見ていく。学校が休みで嬉しい声、日常生活からの解放の声、普段できないことができるため嬉しいといった声もある。学校があることが嫌で会った子や宿題や習い事に追われていた子が追われなくなった安心なども感じている。

この調査では学校が休校期間に行われたこともあり学校生活が送れないことの不安や友達などに会えないことの不安が多かったと思われる。学童へ行っていない子どもは特に家族以外に誰にも会わず過ごすことから、誰にも会えない不安が大きかった。ほとんどの子どもがネガティブな意見を持ち、休校期間を過ごしていたことがわかる。

第2節 つなしょハッピーカードからみる子どもの声

次につなしょハッピーカードの分析から子どもたちの声を見ていく⁵。3月5日から4月22日の分析である。合計で116件の回答がある。内、新型コロナウイルスに関連した声が64件である。こちらは、日にちに分けて紹介する。

まず、休校要請が出た3月5日～では、学校が休みで嬉しいといった声が4件、休校への不満が7件、お店が閉まっていて残念といった声が1件、死者数増加についての内容が1件となっている。

次に休校解除方針表明が発表された3月20日～では、学校が休みで嬉しいといった声が2件、休校への不満が4件、学校へ早く行きたい・友達と会いたい・転校生とお別れできなかったといった学校へ関する声が13件、家庭でのストレスをうかがえる内容が2件、外出できないことへの不満が1件、休校中の宿題についてが3件、楽しみにしていたことが中止になってしまったといった声が5件、今まで通りの生活ができなくなったが2件になる。

7都道府県緊急事態宣言が発表された4月7日～では、学校が休みで嬉しいといった声が1件、休校への不満が3件、友達に会えないが1件、外出できないことへの不満が6件、楽しみにしていたことが中止になったといった声が1件、死者数の増加についての内容が2件になる。

全国緊急事態宣言が発表された4月16日から4月22日では、学校へ行きたいが1件、

⁵ コロナ禍で失われる子どもの「声」2020年3月5日～4月22日

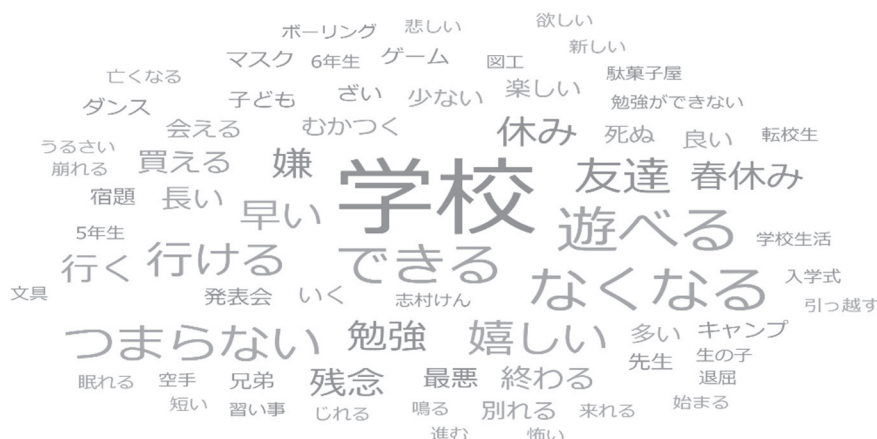
楽しみにしていたことが中止になってしまったといった声が 1 件、新型コロナウイルスについての不満が 2 件、マスクをもらったから使いたい、寄付をしたがそれぞれ 1 件である。

子どもたちの声の変化について、ポジティブ感情とネガティブ感情で見えていくと、休校要請が出た当初は学校が休みで嬉しいといったポジティブ感情も 30%程度見られるが、休校が長引く中でポジティブ感情は 7%程度に減少し、3月20日から4月15日までの期間はネガティブ感情が 90%程度まで昇る。ほとんどの子がネガティブを持ち生活していたことがわかる。全国緊急事態宣言が発表された4月16日から4月22日までの期間について、ネガティブ感情の方が多く、マスクを使いたいや寄付をしたなど新型コロナウイルスの状況を受け入れて生活をしていることがわかる。

ネガティブ感情の変化について、初めは休校への不満がほとんどであったが、次第に、友達に会えない、楽しみにしていたことが中止になった、外出できないことへの不満など学校だけでなく生活に及ぶ影響が大きくなっていることがわかる。また全国緊急事態宣言が発表されたころは新型コロナウイルスへの不満が多くなっていることがわかる。

ポジティブ感情の変化について、学校が休みで嬉しいといった声が多く、全国緊急事態宣言が発表されたころに新型コロナウイルスを受け入れて生活している声も多く見られた。

ここでつなしょハッピーカードに書かれた子どもの声をテキストマイニング⁶する。



これは出現頻度が高い単語を抽出し、その頻度が高い順に大きさを図示しているものである。単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞、灰色が感動詞を表している。出現頻度は次の通りである(表 1 参照)。この表を見ると学校が 22 個と最も多く、次に、遊べる、なくなる、友達、できるが続く。休校期間中が学校へ対する思いが多いと考えられる。また、なくなるが上位になり、新型コロナウイルスが原因で、なくなったものが多かったことが分かる。

以上がつなしょハッピーカードの分析である。子どもたちは休校が長引くにつれ次第に気持ちに変化していることがわかる。また、受け入れて生活を始めた声もみられるようになった。

第 3 節 チャイルドラインから見る子どもの声

⁶ User Local AI テキストマイニング 株式会社ユーザーローカル

最後に、チャイルドライン支援センターに届いた声を紹介する⁷。これは、チャイルドラインにアクセスした子どものうち、新型コロナウイルスに関連した内容を全国のチャイルドライン実施団体において集め、集約したものである。こちらも日にちに分け紹介する。

休校要請が出た2月28日～では、不安に思う、友達と会えなくなってしまうなどの声がみられる。

休校解除方針表明が発表された3月20日～では、時間がたくさんあるが何をしたらいいか分からない、有名人が亡くなりショック、報道が新型コロナウイルス関連のことばかり、新学期が不安という声がみられる。

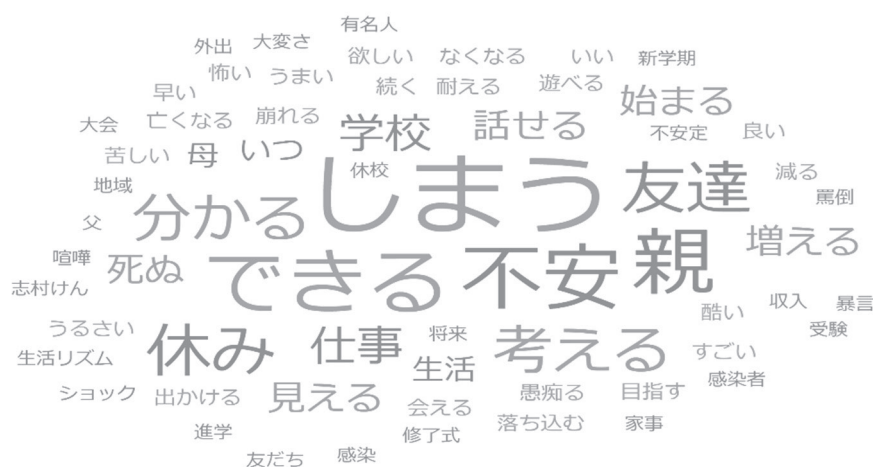
7都道府県緊急事態宣言が発表された4月7日～では、感染する不安、新学期が始まったがいつ学校が始まるか友達ができるか不安、生活習慣の乱れといった声がみられる。

全国緊急事態宣言が発表された4月16日～では、外に出られない、友達と遊べない、会えない、外出自粛からの不安、大会等がなくなることなどの声がみられる。

その他では、家庭が安心ではない状況、新型コロナウイルスに対する不安などがあがる。

この調査でも、休校要請が出たころは学校に対する不安や友達に会えないことなどが多いが、休校が長引き、新型コロナウイルスが流行していくにつれ、感染に関する不安やいつ学校が始まるか分からないストレス、外に出られないことなど学校以外にも生活で影響を及ぼしていることがわかる。

この調査でもテキストマイニングをし、抽出頻度が高い項目を調べる。



こちらはつなしょハッピーカードよりも子どもの声は少ないが、不安や親が5個、休み、友達などの言葉が並ぶ(表2参照)。休校期間中の家庭環境や新型コロナウイルスに対しての不安などの声上がる。

3つの先行研究から学校休校期間中などの子どもの声が明らかになった。子どもたちは家以外の居場所を失っている。3月時点の子どもの声は明らかになったが、学校が再開し、withコロナと言われ、新しい生活様式になった夏以降は子どもたちはどのようなことを思っているのか、また、月1回でも子どもに居場所を提供していた子ども食堂がお弁当配布に変わ

7 「新型コロナウイルス感染症」に関連した子どもの声【事例】 特定非営利活動法人チャイルドライン支援センター 2020年5月26日

りどのようなことを思っているのか疑問に思った。そこで、2年半にわたりお世話になっている愛知県知多郡東浦町にある「子ども食堂はるたま」に実際に子どもの声を調査する。

第二章 子ども食堂はるたまについて

第1節 子ども食堂はるたまのはじまり

コロナ禍の子ども食堂の現状を知るためには現場の声を聴くことが重要だと考えたため、実際に訪問し、インタビュー調査、アンケート調査、参与観察を通して、現場の声を拾い、考察する。

まず、はるたま子ども食堂について紹介をする。はるたま子ども食堂は、子どもの数が100人を超え、とても大人数で活気があふれている子ども食堂である。

はるたま子ども食堂は、「たまごの会」が運営しており、2017年6月から月に1回第3金曜日の学校終わりに、地域の区民館を借りて子ども食堂を開催している。現在4年目になる子ども食堂である。子ども食堂はるたまを運営しているたまごの会は代表が更生婦人会に入っておりそこで行われるフォーラムで「この地区にもご飯すら食べられない子どもがおり、たまり場があれば救える」ということを聞き、子ども食堂を立ち上げるきっかけとなった。子ども食堂を開催するにあたり東浦町は「子どもの貧困」という問題をどのようにとらえているか調べるために、役場福祉課や児童課を訪問し詳しい話を聞き、社会福祉協議会ではワークショップに参加し意見交換等をした。

東浦町が平成28年に地域福祉計画として、子ども・子育て支援計画という計画を出し、コミュニティも場所を貸していただき、チラシや看板なども回覧させていただき、さらに学校も協力してくれた。

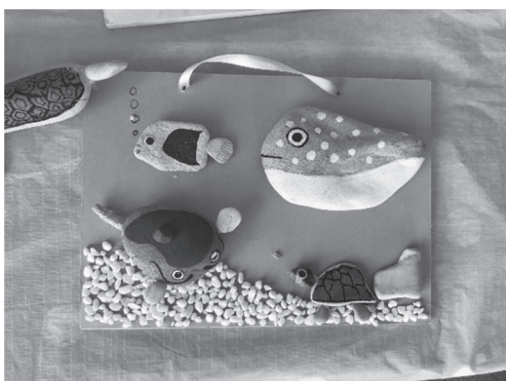
3月に結成し、まずは6月にプレオープンということで、チラシを配ったところ、地域の方から反響がたくさんあった。「何かお手伝いをしたい」といった声がたくさん届き、今では調理ボランティアさんも10人を超える人が手伝ってくれている。はるたま子ども食堂のイラストやのれんをも地域の方が作っていただき、プレオープンでは60人ほどが訪れた。回数を重ねるごとに、様々な問題が出てくるため、試行錯誤を繰り返し、外で遊ぶ子の見守りや帰るころの交通整理などのボランティアさんが協力し、「できるときにできることを」の精神で子ども食堂はるたまは運営されるようになった。

第2節 新型コロナウイルス流行前と後の子ども食堂の変化

次に新型コロナウイルス流行前と後の子ども食堂の変化を見ていく。新型コロナウイルス流行前はこのように子ども食堂を運営していた。時間は14:00-19:00の間子ども食堂は空いている。料金は子どもが200円、大人が300円である。人数は子どもが約100人、大人が約15人、ボランティアやスタッフが約15人であった。

当日の流れは、大体、学校が終わった後の15:30頃から子どもたちが来始める。子どもたちは来たら参加者カードにスタンプを打ち、料金を払い、名札を作り、遊び始める。参加者カードは名前や学年、住所、連絡先、アレルギーの有無などが書かれているカードである。16:00になったら工作教室が開始される。毎回、工作を用意してくれる地域のおじいちゃんがおおり、作品を考えること、材料や道具の準備、パーツを切るなどの事前準備もすべてしてくれている。工作教室のボランティアは6人ほどおり、毎回たくさんの子どもの参加

している。工作には、普段使わないような、竹や木の枝、石など自然なものがたくさん使われており、とても凝ったものが作られる。(下画像参照)



このように、石や木などの自然なもので工作教室が開かれる。このように立派な工作は家ではできないことが多いため、子どもや親から喜ばれている。先生は、工作の見本はあるが、子どもが自由な発想で考えて作っているため、毎回、子どもの発想はすごいな、と驚かされると言っていたのが印象的だった。

また毎回絵本の読み聞かせに来てくれているボランティアさんやボードゲームや将棋の相手をしてくれるボランティアさんもおおり、子どもたちは工作や宿題、ボードゲーム、トランプ、外遊びなど様々なことをしてご飯までの間を過ごしている。

17:30 になると受付を終了し遊ぶのをやめ、ご飯を食べる準備に入る。部屋を片付け、机を並べ、100人以上が食べられるように工夫しながらスペースを作る。ご飯を食べる準備が整ったら、子どもたちが指示のもと自分でご飯を取りに行き、全員にご飯が行き届いたら、みんないただきますをしてご飯を食べる。子どもたちは食べ終わった子からおかわりがあるときはおかわりをし、楽しくワイワイ食べる。ほとんどの子が食べ終わったタイミングでみんなでご馳走様をし、迎えに来た子から解散という流れになっている。





その季節にちなんだ食材が並ぶ。地元の方の寄付やフードバンクから食材をもらい、ご飯を作っている。会場の扉に寄付してくださった人の名前が書かれた紙が貼られ、また、いただきますをする前にも誰からもらったのかを代表の方が伝えてから、いただきますをして食べ始めている。

また、季節のイベントなどもやっており、夏にはかき氷を作ったり、ハロウィンにはボディペイント、クリスマスにはサンタさんがお菓子を配りに来たり、クリスマスコンサートなども実施している。



クリスマスコンサートは東浦フィルハーモニー管弦楽団の方が来てくれ、演奏をしてくださった。他にも、鷹匠体験ができ、タカやフクロウ、ハヤブサなどを触ることができる体験や、ハロウィンのボディペイントなど子どもたちがわくわくするような体験やイベントがたくさんある。

以上が新型コロナウイルス流行前のはるたま子ども食堂の様子である。次に、新型コロナ



ウイルス流行後の子ども食堂の様子を述べていく。まず、はるたま子ども食堂は3月から子ども食堂が中止になった。4月も中止し、5月は食料配布、6月からお弁当配布という形で子ども食堂を開いている。お弁当配布などは初めてであるため毎月試行錯誤をしながら行っている。

まず、時間は16:30-17:30であり、料金について5月は無料、6月と7月は大人も子どもも100円、8月からは大人も子どもも200円になっている。お弁当の数は毎回120個ほど用意する。スタッフは約10人で運営している。

次にお弁当配布の様子である。16:30に配布開始となっているが毎回早めにもらいに来る人が集まり、開始時には外に20組ほどが列を作っている。お弁当をもらいに来る人は、まず、氏名や学校名、連絡先などをスタッフに伝え、スタッフは紙に記入する。お金を人数

分もらい、大人はお弁当、子どもはお弁当とお菓子をもらい、帰るといった流れになっている。毎回30分も経たないうちに完売してしまう。30人ほどがもらえないこともあった。

お弁当配布になってからは大きなイベントはないが、9月には東浦町商工会青年部によって焼きそばやかき氷、ミニ弁当配布、ミニゲームなどの小さな縁日のようなイベントも開かれた。そこでもアルコール消毒の徹底、参加者の検温など、感染症予防の徹底もしていた。また、お弁当配布になってから、新たな利用者も増えた。



お弁当はこのような感じになっており、フードバンクやセカンドハーベスト、地域の方からの寄付で作っている。子ども限定でお菓子やジュースや缶詰、即席の味噌汁などを袋に詰め合わせて配っている。



上の写真は9月に行われた子ども食堂の様子である。小さいお祭りのような感じで開かれた。ミニゲームは子ども限定である。右下の写真は普段の配布の様子である。子どもや大人が並びお弁当やお菓子を受け取る。

新型コロナウイルス流行前と流行後についての変化を述べた。新型コロナウイルスが流行した影響でお弁当配布に切り替わったことが大きく異なる。また、変わったと感じる点は、子ども食堂に来る層が変わったと感じた。「初めて来た」という声を聞くことが増えた。さらに、1人で二個もって帰れるため、保護者と幼稚園や保育園児、小学校低学年の子が多く来る。16:30から開催しているため仕事がある親などは間に合わないという声も多く聞く。以前は子どもだけで来て子ども食堂でご飯を食べ保護者が迎えに来るといった形が多かったが、今は子どもだけで来ている子もいるが、ほとんどの子が保護者と一緒に来ている。

第三章 子ども食堂利用者の声

第1節 調査結果

実際に5月以降お弁当配布に切り替わり、子どもや大人の声が明らかになっていない。お弁当配布に来ている利用者はどのようなことを思っているのか、また、運営者やボランティアはどのようなことを思っているか調査した。

調査内容は記述方式で、はるたま子ども食堂利用者が対象者である。2020年10月に実施した。

大人と子どもの質問内容は以下の通りである。

Q1 今日の感想や好きなメニュー、ほしいもの、楽しかったこと、困っていること、どんなことでもいいので書いてください。

Q2 新型コロナウイルスについてどのようなイメージですか。また、新型コロナウイルスが落ち着いたらしたいことを教えてください。

運営者とボランティアの質問内容は以下の通りである。

Q1 今日の感想や好きなメニュー、ほしいもの、楽しかったこと、困っていること、どんなことでもいいので書いてください。

Q2 新型コロナウイルスが落ち着いたらしたいことを教えてください。

Q3 子ども食堂や地域の集まりはあなたにとってどのような存在ですか。

回答数は以下の通りである。(図3参照)

大人と子ども…52名

運営者とボランティア…7名

Q1 今日の感想や好きなメニュー、ほしいもの、楽しかったこと、困っていること、どんなことでもいいので書いてください。

保育園児・幼稚園児の意見

からあげ、つけもの、ラーメン、焼きそば、おだんご、おはぎ、お好み焼き、チーズケーキ
ハンバーグがおいしい、いつもいろいろなお土産が入っていて楽しみ
ほしいものはお菓子、ジュース、チョコパンで、好きなメニューはごはん、ハンバーグ、卵焼き
たまご、ミートボール、ソーセージ、ハンバーガー、お弁当だと家でゆっくり食べれるから良い、砂遊びが楽しい

小学生の意見

1年生	ハンバーグ
1年生	ハンバーグ、ソーセージ
1年生	お肉
1年生	ポテト、カレー、からあげ。おいしいし、作ってくれてうれしい。それと、焼き肉もいっぱいおかわりして元気な女の子になりそうです。ありがとうございます。
2年生	大放課でサッカーやフリスビーをしたこと
2年生	焼きそば、食べるのが楽しみ、お菓子の作るスライムが欲しい
2年生	はるたまのお弁当が全部おいしい。フルーツが欲しい。
2年生	焼きそばがおいしい。メロンが欲しい。
2年生	カレーナン、チーズハンバーグ
2年生	春巻き
3年生	ハンバーガーを出して欲しい。
3年生	カレー、お肉、お寿司
3年生	時間が間に合わないから遅くして欲しい。17時からとか。
3年生	楽しかった。
4年生	ニンテンドースイッチ、すとぷりグッズ
4年生	新しいスマホ、ニンテンドースイッチ、すとぷりグッズ
4年生	お寿司、理由は料理がおいしいから。
4年生	からあげ、チップとデールの缶バッチが欲しい。
4年生	カレー、ハンバーグ
4年生	チーズ入りハンバーグ、カレー
4年生	ポテトフライ、軟骨のからあげ、近くでおいしいお弁当を作ってくれるのでとてもうれしいです。それに子どもだけで来れるので、迷惑が掛からなくて良いです。
5年生	お寿司、ラーメン、ハンバーグ、ケーキ

5年生	学校で放課が楽しかった。はるたまのインスタントの味噌汁がおいしい。
5年生	きなこあげパン、冬のじゅうたんテレビゲームが欲しい。
5年生	焼きそばがおいしい。桃が欲しい。焼くところを見るのが楽しくて面白い。お菓子がおいしい。
5年生	楽しい。カレー、スープ。クリスマスコンサートが楽しかった。
5年生	ビビンバがとても大好き。
5年生	安くておいしい。
5年生	まだ来てないのでわかりません。

大人の意見

今日は用事も少なく、ゆっくり過ごせて良かった。
いつもたくさんお菓子など嬉しい。食べられないもの、家では誰も食べないものをどうしたらいいかと思うことがあるので、周りの人と交換できたらいいなと思います。子どもたちはとても楽しみにしています。
毎月助かります。
子どもを連れて並ぶ時間が大変なので、スムーズに受け取りができると助かります。
もう少し子どもの好きなお菓子だとありがたい。
からあげなど子どもの好きなメニューを増やして欲しい。
おいしい食事を格安で提供してくださりありがとうございます。1人2食までですと密な状況になってしまうかと思います。最大4食までできると助かります。駐車場の整理をしてくれる方がいると助かります。
子ども向けのからあげ、エビフライ等が良いと思います。
両親がいるのに来る子どもがいる。どうかな。
いつも楽しませてもらっています。豚汁、ハンバーグ、お鍋。クリスマスのコンサートが楽しかった。
ちらし寿司、からあげ
からあげ、ハンバーグ
からあげ、ハンバーグ
餃子、ハンバーグ
よくこの子ども食堂の話聞きます。値段以上に豪華で驚いた。
巻きずし、みそおでん、焼き肉。行けなかったのですが、ミニゲームを子どもが楽しみにしていたのでまたあると嬉しいです。工作も喜んでいきます(竹や木を使っているのがgood!)。愛知県の郷土料理を入れてもらえると子どもも大人も良いかなと思います。
素敵な企画をありがとうございます。
はじめてきました。また来ます。

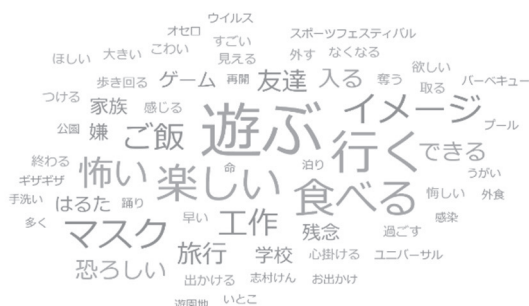
以上が Q1 の回答である。子どもは好きなメニューを書いている子どもが多いと感じる。また、大人は子どもに沿ったメニューやお菓子を望んでいる声もみられることが分かる。さらに、詳しく分析し、使用頻度が高い単語を分析するためテキストマイニングをする。

1年生	オセロがしたい。
1年生	工作が楽しいから工作がしたい。
2年生	遊園地かユニバーサルへ行きたい。
2年生	みんなでご飯を食べたい。
2年生	コロナウイルスが終わったらみんなと遊びたい。
2年生	色んなところへ行って楽しみたい。
2年生	ゲームができなくなって残念。いろいろ再開してほしい。特に工作など
2年生	いとこと遊びたい。
3年生	コロナウイルスがなくなったら中へ入って遊びたい。
3年生	イメージはギザギザしていてすごいいっぱいある感じ。コロナがなくなったらはるたまで遊びたい。
3年生	友達と遊んだり食べたりしたい。
3年生	嫌なイメージ
4年生	楽しく出かけた。
4年生	またみんなでご飯が食べたい。
4年生	ゲームができなくなって残念。
4年生	怖いイメージ。コロナウイルスがなくなったら、またはるたまでご飯が食べたい。あとまた工作したい。
4年生	コロナウイルスがなくなったらみんなで前のようにご飯が食べたい。コロナウイルスは志村けんさんや多くの命を奪ったりしたので悔しい。私もその中に入らないように手洗い・うがいを心掛けたいです。
5年生	嫌なウイルス。マスクなしで学校へ行きたい。
5年生	コロナウイルスになりたくない。なくなったら学校のスポーツフェスティバルをしたい。
5年生	家族と楽しく旅行がしたい。あと、友達とかと、お泊り会とかをして、楽しいことをたくさんしたい。イメージはとても恐ろしく、これまで経験したことがなく、元気に過ごしたい。早くなくなって欲しい。
5年生	怖くて恐ろしい感じ。なくなったら近くで踊りがしたい。
5年生	最悪なイメージ。コロナがなくなったら遊びたい。
5年生	とても怖く感じる。コロナウイルスがなくなったらみんなでお食がしたい。
5年生	怖い。遊びたい。
5年生	マスクを外して歩き回りたい。

大人の回答

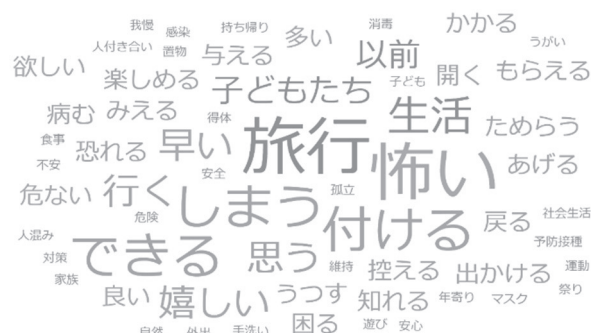
コロナについては困ってしまいます。マスクなく前のように生活できたらそれでよし。
もうよくわからない。早く以前の生活に戻りたい。
年寄りにうつすのが怖いので気を付けています。旅行したいです。
子どもに不安を与えたり我慢させたりすることが多いのでみんなでお楽しみイベントを開いてもらえると嬉しいです。

次に、子どものみの結果である。



この結果、遊ぶが 8 個、行く、マスク、イメージ、食べる、楽しいなどの言葉が並ぶ(表 8 参照)。子どもたちは遊ぶことやどこかへ行くこと、みんなで食べることなどを我慢している状況にあることが分かる。新型コロナウイルスのイメージとしては、「怖い」や「マスク」が多くあげられていることが分かる。どこからか突然来た訳も分からないウイルスに怖さ、そして、マスク生活になったことが印象に残っていると感じた。

これは、大人の結果である



大人は、旅行が 5 個、怖い、生活、付ける、しまう、できるの単語が並ぶ(表 9 参照)。大人は旅行や以前の生活を待ち望み、旅行へ行く以外にも、怖いや生活などの言葉も上位に入る。子どもたちは新型コロナウイルスがなくなったら遊びたいやお出かけに行きたい、みんなでご飯が食べたい、仕事がしたいなどを望んでいることがわかった。はるたま子ども食堂で遊びたいといった声も多く集まり、再開を望んでいる。しかし、はるたま子ども食堂は 100 人を超える大人数が集まるため、確実に感染防止対策が取れるようになるまで、再開については、未定である。新型コロナウイルス関係の声では、子どもは遊びたいといった声や保護者は感染防止対策の徹底といった声が多くあがっている。

第 2 節 子どもの声の比較

第二章で述べた先行研究と今回の子どもの声を比較する。先行研究は主に 2020 年 3 月から 4 月に行った調査で今回は 2020 年 10 月に行っている。春頃はまだ新型コロナウイルスが広まり始めたころであり、突然来た新型コロナウイルスというものに対して慣れていない時期である。今回は秋ということで、with コロナと言われ、新型コロナウイルスに対して受け入れ始めている時期である。

子どもの声の似ている点は、自由に遊びたい、旅行がしたい、新型コロナウイルスになり

たくない、怖いなどが似ている意見である。新型コロナウイルスの影響で3月ころから現在まで、子どもたちは自由に遊ぶことが出来ず、みんなで食事をすることや旅行をするなどが出来ず、我慢し続けていることがわかる。また、新型コロナウイルスにかかりたくない、怖いなどの感情も継続してあることがわかった。新型コロナウイルスにかかる不安がずっと続いていることがわかる。

次に、子どもの声で変わった点では、春と比べて、新型コロナウイルスを受け入れて行動しているといった点である。春は、学校が休校であったことや子どもたちにとって楽しみにしていたイベントや旅行、部活動の大会などがほぼ中止になり、悲しむ子どもたちの声が多くあがっていた。しかし、秋には、大規模なイベントは開かれることはない。楽しみにしていたが中止になったという状況はかなり減ったと思う。さらに、手洗い・うがい・消毒の徹底、予防接種、人込みに行かないなど、新型コロナウイルスと共に生活する上で重要なことも多くあげられた。また、新型コロナウイルスが流行し始めてから、生活する上でマスクが欠かせなくなった。春には、マスクが出回らず、マスクがないといった声もあったが、秋は、ほぼマスクが売られているようになった。マスクが欠かせない今、マスクなしの生活に戻りたいといった声もあった。

子どもの声を比較すると、長期にわたって自由に遊ぶことを我慢していることや新型コロナウイルスに対して受け入れて生活し始めていることなどが分かった。ここまで子ども食堂利用者の声をまとめた。子ども食堂利用者のほかに、子ども食堂の運営者やスタッフにも同じようなアンケートを行い、子ども食堂の運営者やボランティア側からの子ども食堂についての声や新型コロナウイルスについての声を調査していく。

第四章 スタッフと運営者の声

Q1 今日の感想や好きなメニュー、ほしいもの、楽しかったこと、困っていること、どんなことでもいいので書いてください。

大勢の人が来て下さった。準備した食事が足らなくなった。
たくさんの方が来て下さって、とても忙しかったです、とてもうれしかった。
たくさんの方が来て下さり、やりがいがありました。人数は何人までといった様に区切ってもいいかと思った。
精一杯作りました。求めていただけで良かった。
来て下さった方全員にいきわたらないのが残念に思いました。うまく調達できて、みんながニコニコしていただける方法が見つかるといいな。
ちょっと疲れるけど気持ちの良い疲れです。
たくさんの方が来て下さって地域で必要とされていることを実感できた。

運営者やスタッフはたくさんの方が来てくれたことが印象的と書かれている。また、120食なので、全員に配れないといったことが書かれていた。毎回、たくさんのお弁当を作り、時間ギリギリまでお弁当を詰めている。そのため忙しいが、やりがいを感じているという意見もあった。

Q2 新型コロナウイルスが落ち着いたらしたいことを教えてください。

旅行したい。
コロナで会えなかった方々とたくさんおしゃべりがしたいし、どこかへ行きたい。
みんなとおしゃべりや食事に行きたい。
人が遠慮なく集まれるようになったらイベントをしたい。人と人をつないで楽しみたい。
みんなが顔を合わせておしゃべりができるようになるといいですね。
ゆっくり友人とおしゃべり。
旅行

先ほど調査した子ども食堂利用者アンケートと同じような内容であった。旅行やおしゃべりなどのことをしたいと書かれていた。

Q3 子ども食堂や地域の集まりはあなたにとってどのような存在ですか。

来るのが楽しいところ。
私の生きがいになっています。
少しでも私にも手助けをできることがあるのは、やりがいにつながります。
人の温かさを知れるところです。人は信じるに足ります。
玉ねぎの皮むき程度しかお手伝いできませんが、いろいろな交流があり、少しは他の方の手助けになればうれしいです。
自分の存在を証明できるところ
地域との関わりの場

Q3 では運営者やボランティアはこの子ども食堂や地域の集まりはどのような場所になっているかを聞いた項目である。「生きがい」や「やりがい」、「温かさを知れる」、「自分の存在を証明できる」などの言葉が並び、生活の一部として欠かせない場所になっていることがわかる。

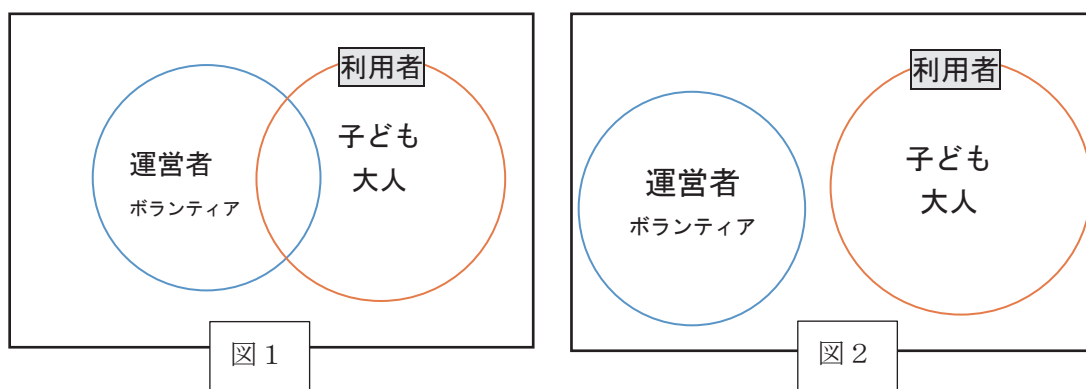
密の空間を避けるため、普段いるボランティアの半分で子ども食堂の運営を行った月があった。帰り際に運営者の方と話していると、「今回来れなかったスタッフさんも子ども食堂へ来たがっている。子ども食堂へ行きたい。」と言っているスタッフがたくさんいるという話を聞いた。その話を聞いたときに、子ども食堂は子どもの居場所になるのはもちろん、運営者や普段手伝いに来ているスタッフも子ども食堂が居場所になっているのではないかと考えるきっかけになった。次の章では、子ども食堂利用者とは誰かを考え、子ども食堂へ来ている子どもと運営者やスタッフの関係はどのような関係になっているかを考えていく。

第五章 子ども食堂利用者として考えられるもの

子ども食堂利用者とはそもそも誰なのかということ考えた。子ども食堂利用者について、誰もがイメージするものは、「子ども」だろう。名前に「子ども」とついているため、もちろん子どもが一番の利用者と考えることが普通である。さらに、子どもを育てている親世代も対象者であるも多い。また、子ども食堂は子どもがひとりでご飯を食べる「孤食」や子ど

もの貧困と共にニュースや新聞などのメディアで取り上げられることが多いことから、貧困の子が行くところという認識もあるかもしれない。

しかし、利用者の視点を変えてみると、子ども食堂は貧困の子だけでなく、地域の子どもや高齢者、さらに運営者やスタッフなども利用者ということになるのではないかと考えた。



これは考えられる利用者の構図である。このアンケートをするまでは、図2のように考えていたが、図1である可能性もあるのではないかと考えた。図2について子ども食堂利用者は子どもと大人だけであり、運営者やボランティアは、利用者ではなく、あくまでも子どもたちを支える側である図である。しかし図1は子どもと大人も利用者であるのは当然だが、運営者やボランティアも利用者の一部になっているのではないかと図である。

子ども食堂はボランティアで運営していることが多い。儲けるものではなくて、子どもたちを救う目的や地域の居場所づくりが目的で子ども食堂をしている運営者が多い。市場にある一般的な、生産者・販売者・消費者のようなモノを「作る」「売る」「買う」のような関係でもなく、自治会のような、市民・市議会・市長・行政のような関係でもない。子ども食堂は子どもや地域の人に居場所を与えることやご飯を食べられない子などにご飯を与えるものである。運営者の思いは、子どもや地域の人に居場所を作り安心できる地域社会になることやご飯が満足に食べられない子どもにご飯を食べさせて子どもたちを救うといった目的でしていることが多い。子ども食堂は利益を出すことを目的と敷いていない。

子ども食堂において、子どもや大人と運営者やボランティアの関係は、子どもや大人は運営者やボランティアからご飯や子ども食堂という居場所を与えられ、運営者やボランティアは子ども食堂があることによって自分の居場所になったりすることや子どもたちの元気やパワーをもらえるといった構図がみえてくると考える。そのような構図が図1である。運営者やボランティアと子どもや大人は利用者として重なり合う部分があるのではないかと。

利用者とは、「広い意味では、何かを使用する者、全般について使われる言葉である。物や施設・サービスを利用するものは利用者と呼ばれる」と書いてあることから、子ども食堂利用者として当てはまると考えることができる。

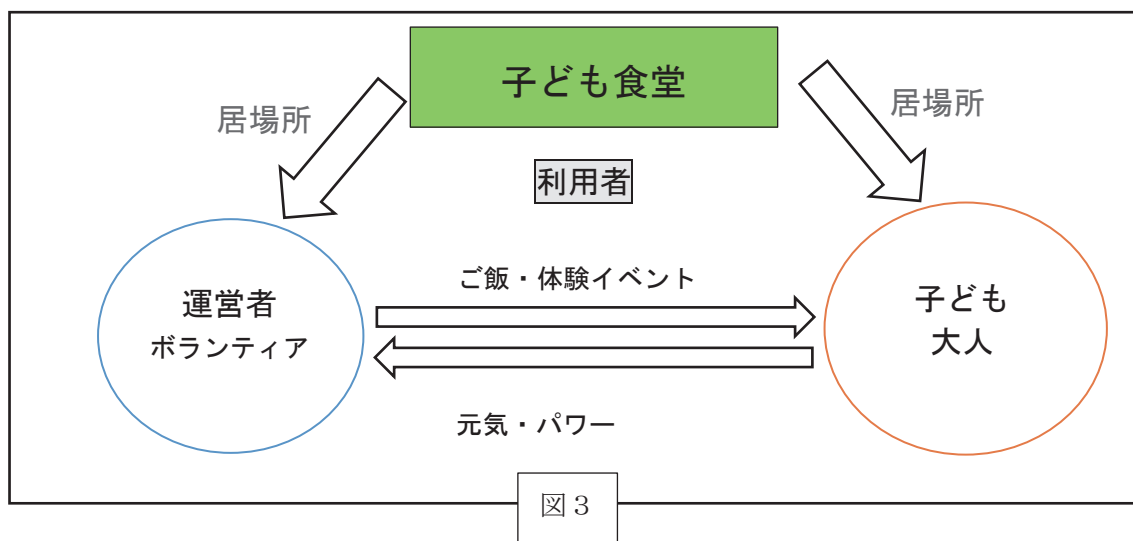


図3のように、子ども食堂があることによって特定の子どもや大人が救われるのではなく、運営者を含めて地域住民みんなが救われているのではないかと考えた。子ども食堂には、運営者やボランティア・大人と子どもに居場所を与えてくれる役割がある。

この子ども食堂の関係を深く考えていく。その中で子ども食堂の関係は贈与に近いものがあるのではと考えた。贈与とは、金品や品物を送り与えることと書いてある。さらに調べていくと、贈与論があることが分かった。

贈与論とは、マルセル・モースが、贈与が単なる経済原則を超えた別種の原理を内在させていることを示した研究である。贈与交換のシステムが、法、道徳、宗教、経済、身体的・生理学現象、象徴表現の諸領域に還元不可能な「全体的社会的事象」であるという画期的な概念である。「贈与」では「贈る」、「受け取る」、「返す」が義務として行われているとされる。図3では運営者やスタッフが子ども食堂でご飯・体験イベントなどを与え、子どもや大人は子どもにしかもっていないパワーや元気などを返す。そして子ども食堂は全員に居場所を提供する。そのような関係性になっている。また、「贈与」は精神的なコミュニケーションであり、現代の経済活動とは全く別のものであるとされる。子ども食堂は利益を出すことを目的としている訳ではなく、子どもたちを救うことや地域の居場所を作り孤立を防ぐ効果がある。精神的なつながりが最も大切にされる場である。子ども食堂は運営者やスタッフ、子どもと大人のお互いが子ども贈与のような関係性で結ばれていると考えた。

このことから、子ども食堂利用者は子ども食堂にいる人全員ということになるだろう。子ども食堂とは、保護者の就労等により、家庭において保護者らとともに食事を摂ることができない子ども等を防ぐため、夕食の提供や交流を図り、子ども食堂に参加する子どもたちが、子ども同士あるいは、子どもを支える支援者らとともに過ごす取り組みである、と言われている。子ども食堂は子どもを助けるということから始まったが、子ども食堂があることによって、子ども食堂に関わるすべての人が救われる可能性も秘めている。

第六章 これからの子ども食堂

本稿は休校期間中の子どもの声を明らかにし、休校期間明けの with コロナと言われる新しい生活様式で生活している子ども食堂利用者の声を手掛かりに考察した。その結果、メニ

ューの充実や感染防止対策の徹底、遊び場を求めていることが明らかになった。

また、運営者やスタッフのアンケートの結果から子ども食堂利用者は子ども食堂にいる人全員になるのではないかということがわかった。子ども食堂は子どもや大人、運営者やスタッフなど子ども食堂へ関わる人、来る人全員が一緒になって地域の居場所を作っていく必要があると感じた。

このアンケートの結果から、子どもと大人の子ども食堂へ望んでいることがわかる。子どもや大人は子ども食堂にメニューの充実や感染防止対策の徹底、遊び場が欲しいといったことを望んでいる声が多い。新型コロナウイルスが流行し、子ども食堂が流行前のような活動ができていない中で新しく子ども食堂について考える必要があると感じる。

まず、メニューの充実について、子ども食堂は基本的にフードバンクやセカンドハーベストから食材やお菓子を提供してもらい運営している。子どもたちの意見に沿った食材がない可能性もあるが、栄養面やメニューの種類の豊富さなど子どもたちが楽しみと感じてくれる工夫が必要だと感じた。

次に感染防止対策の徹底について、先着順になるため、どうしても早くから子どもや大人が集まってしまう。また、一人でも多くの人に届けたいという思いから一人につき持って帰れる個数を制限しているため、どうしても人数が多く集まる。外で開催しているとは言え密の空間になっている。時間通りに来ることの徹底やお弁当をより多く作ることなどの対策も必要である。必要以上に人数が並ばないようにする工夫が必要になる。

最後に遊び場の確保である。お弁当配布になってから遊び場は開いていない。主に室内でしか遊べないからである。子どもたちにとって大切な遊びを確保するためには、室内の場合、人数制限での実施、予約制、検温、アルコール消毒など様々な対策をする必要がある。外で遊ぶ場合は遊び場の確保が必要である。

前例のない、このような状況になった今、子ども食堂は試行錯誤の運営になっている。子ども食堂に関わる人全員が心地よい空間にするために、子どもや大人が望んでいることなどを配慮して、地域で子ども食堂を作っていく必要があると感じる。

参考文献

- ・NPO 法人 全国子ども食堂支援センター・むすびえ(<https://musubie.org/project/research/>)
2020年11月15日閲覧
- ・子どもの貧困Ⅱ 著者 阿部彩 発行 岩波新書 2014年1月21日発行
- ・社会経済状況と子どもの食生活-あいち子ども食堂ネットワーク学習交流会の記録
- ・子供食堂と地域が連携して進める食育活動事例集 平成30年3月
- ・コロナ時代の子ども食堂 食卓をめぐるソシアビリテの誕生と変容 成元哲 2020年9月
- ・われらの子ども-米国における機会格差の拡大- 著者 ロバート・D.パットナム 出版 創元社 2017年3月23日発行
- ・《資料1》「新型コロナウイルス感染症」に関連した子どもの声【事例】2020年5月26日
- ・《資料2》「新型コロナウイルス感染症」に関連した子どもの声【データ・速報】2020年5月27日
- ・《資料3》「新型コロナウイルス感染症」関連で休校が始まった月の子どもの声【3月・昨

年度のデータ比較】2020年5月26日

特定非営利活動法人チャイルドライン支援センター

- ・子ども食堂はるたま Facebook https://m.facebook.com/harutama1480/?locale2=ja_JP
- ・贈与論 著者 マルセル・モース 発行 株式会社筑摩書房 2015年6月26日発行
- ・新刊大恐慌の子どもたち 著者 グレン・H・エルダー 発行 赤石書店 1991年11月10日発行

謝辞

本論文を作成するにあたり、2年半の期間、参加させていただき、アンケート調査などに協力していただいた「はるたま子ども食堂」の方々に厚く御礼申し上げます。毎月はるたま子ども食堂へ向かう度に温かく迎え入れて頂き、子ども食堂が居場所になるということが身をもって認識でき、筆者自身もはるたま子ども食堂が居場所になっていると感じました。そして、成ゼミの同級生、さらに、励まし温かく見守って下さった方に、この場を借りて改めて深く感謝いたします。